

SEINAN CHANTEURS



2006

《創立52周年》
西南シャントゥール第29回定期演奏会
 SEINAN CHANTEURS ANNUAL CONCERT 2006
 《贊助》 沖縄男声合唱団

2006年12月2日(土) 午後18:30開演
 アクロス福岡シンフォニーホール

主催/西南シャントゥール 共催/西南学院大学同窓会・西南学院グリークラブOB会
 後援/福岡市・福岡市教育委員会・(財)福岡市文化芸術振興財団・福岡音楽団体連絡会・福岡県合唱連盟・西日本新聞社



「2005定期演奏会」より



西南シャントゥール
会長／鶴原 太郎

今年も早くも12月を迎えることになりました。何かと騒々しい一年ではなかったでしょうか。幸いシャントゥールはこの一年、比較的順調に過ごして参り、今日、皆様方の前で06年の成果を披露し、忌憚のないご意見を賜りたくステージに立ちます。

今年は昨年、沖縄演奏旅行でお世話になりました沖縄男声合唱団を迎え、その素晴らしい歌声を堪能して戴きたく、遠路、駆けつけてくださいました沖縄男声合唱団の皆様に厚くお礼を申します。

シャントゥールは西南グリークラブのOBの合唱団であることはご承知の通り、今年は58名でステージに立つことが出来ました。ただ、残念ながら出身母体であります西南グリーのメンバーが少子化と男女共学の影響をモロに被り危機存亡の有様です。学院の式典等でグリーを必要な場合は私共が駆けつけることもあると云うのが現状です。

ご来場のご子弟が大学進を希望されるような場合、是非西南グリーを思い出して戴きご推挙下されば幸甚に存知ます。

シャントゥールは永遠です。グリー又然りです。

ご来場、心から感謝致します。有り難うご座居ました。



西南学院グリークラブOB会
会長／刀根 亨一

今宵は多数の方々にご来場賜りまして厚く御礼申し上げます。西南学院グリークラブの伝統のシンボルである西南シャントゥールが、沖縄男声合唱団をお迎えして第29回定期演奏会を開催することになり、OB一同慶びに耐えません。今年は私も初めてメンバーの一員として、春から練習を積みこのステージを度々いました。

昭和22年朝日新聞主催第一回コンクールに出場、当時25才だった石丸寛さんの編曲指揮で本邦初演のロシア民謡「カチューシャ」を歌い、感激の優勝を果して以来、私にとっては60年ぶりの大ステージであります。「カチューシャ」は正に戦後のグリークラブ復活の産声であり、同時に指揮者石丸寛さんの音楽界デビューの思い出の曲でもあります。その後、グリークラブが長年に亘り多くのグリーメンによって歌い継がれてきましたが、昨今演奏活動を停止していると聞き、まことに残念至極、身につまされる思いが致ります。

志ある学生諸君によって一日も早く再興の狼煙をあげていただきたくOB一同切に希望し同時に熱い支援を惜しません。

さて、本日は平均年齢65歳という、もはや人生の白秋を過ぎんとするシャントゥールの男達が、高村光太郎と智恵子の峻烈な愛の詩「智恵子抄」と、人生の綾を織りなすように自然の情景を詠った「心の四季」、それに魂を揺さぶるような黒人靈歌等を抒情豊かに歌い上げます。

シャントゥールは孤高の男声合唱団として伝統を守り演奏活動を続けてきました。受け継がれなくして伝統はありません。これからもシャントゥールが変革を恐れず、若いOB達を容し、更に魅力的な合唱団を目指してこそ後輩も同じ旗のもとに結集するであります。

本日ご来場の皆様には、今後変わらぬご声援とご叱責を賜りますようお願い申し上げましてご挨拶といたします。



[I 部]

Yell Ah Seinan !

I. 『智恵子抄』より

作詩・歌/ 高村光太郎

作曲/ 清水 倭

- 智恵子抄卷末のうた六首

指揮: 佐藤 棟也

ピアノ: 植村 和彦

- 或る夜のこころ

II. 《贊助》沖縄男声合唱団

『沖縄の歌』

指揮: 宮城 敏

ピアノ: 宮城佳代子

- 男の子の子守唄

たんちやめーぬ はま

- 谷茶前之浜

- 鳩間節

- 海ぬチンボウラ

かり ゆし

- だんじゅ嘉利吉

— 休憩 —



[II 部]

III. 男声合唱組曲『心の四季』

作詩・歌/ 吉野 弘

作曲/ 高田三郎

編曲/ 須賀敬一

- 風が

- みずすまし

- 流れ

- 山が

- 愛そして風

- 雪の日に

- 真昼の星

指揮: 徳永和彦

ピアノ: 植村和彦

IV. 《合同演奏》Afro-American Spirituals

指揮: 徳永和彦

- Steal Away

編曲/ 石丸 寛

- Nobody knows de Trouble I see

編曲/ Leonard de Paur

- Go down Moses

編曲/ 石丸 寛

指揮: 宮城 敏

- Ride the Chariot

編曲/ Wm. Henry Smith

- Soon ah will be done

編曲/ William L. Dawson

高村光太郎

ひとむきにむしやぶりつきて為事するわれをさびしと思ふな智恵子
氣ちがひといふおどろしき言葉も人は智恵子をよばむとすなり
いちめんに松の花粉は涙をとび智恵子尾長とともにがらとなる
わが為事いのちかたむけて成るきはを智恵子は知りき知りていたみき
この家に智恵子の息吹みちてのこりひとりめつぶる吾をいねしめず
光太郎智恵子はたぐひなき夢をきづきてむかし此所に住みにき

或る夜のこころ — 智恵子抄より —

高村光太郎

七月の夜の月は
見よ、ボプラアの林に熱を病めり
かすかに漂ふシクラメンの香りは
言葉なき君が唇にすり泣けり
森も、道も、草も、遠き街も
いわれなきかなしみにもだえて
ほのかに白き溜息を吐けり

ならびゆくわかき二人は
手を取りて黒き土を踏めり
みえざる魔神はまき酒を傾け
地にとどろく終列車のひびきは人の運命を
あざわらふに似たり
魂はしのびやかに痙攣をおこし
印度更紗の帯はやや汗ばみて
抨火教徒の忍黙をつづけむとす
ここるよ、ここる
わがここるよ、めざめよ
君がここるよ、めざめよ
こはなに事を意味するならむ
断ちがたく、苦しく、のがれまほしく
又あまく、去りがたく、堪へがたく—
ここるよ、ここるよ
病の床を起き出でよ
そのアツシユの仮睡をふりすてよ
されど眼に見ゆるもの今はみな狂ほしきなり
七月の夜の月も
見よ、ボプラアの林に熱を病めり
やみがたき病よ
わがここるは温室の草の上
うつくしき毒虫の為にさいなまる
ここるよ、ここるよ
あはれ何を呼びたまふや
今は無言の領する夜半なるものを—

I 『智恵子抄』より

「智恵子抄卷末のうた六首」

「或る夜のこころ」

「智恵子抄」誰もが一度はその芸術に接し、誰もが深い感動を覚えた詩集ではないでしょうか。ロダンにあこがれ詩や彫刻に心情を刻んだ光太郎とセザンヌに傾倒し、油絵に打ち込んだ智恵子とのまれにみる美しい純愛の詩集となっています。

作曲家 清水脩もまたこの「智恵子抄」が出版された昭和16年秋、この詩集に接し、「私は異常なほどの感動を覚えた。以後、この愛情の詩に曲をつけたいと思いつづけていた。」とその気持ちを吐露しています。

本日演奏致します「智恵子抄卷末のうた六首」はその題名通り「智恵子抄」の巻末に詠われている六首の短歌に作曲されたものであり、光太郎、智恵子の愛を高らかに歌い上げています。

また「或る夜のこころ」は「智恵子抄」の中で光太郎29才、智恵子26才の時の2番目の詩であり、智恵子に対する光太郎の熱い思いがつづられています。

明治16年生まれの光太郎、19年生まれの智恵子にとって今年は光太郎没後50年、智恵子誕生120年にあたります。その節目の年に「智恵子抄」をうたう喜びを感じつつ心を込めてこの曲に向き合いたいと思います。

(記・指揮者／佐藤棟也)

II 『沖縄の歌』

男の子の子守歌

可愛い子よ、あなたが泣けば私も泣いてしまう、泣いてしまうと骨付きの魚をあげよう、(あなたが)笑えば大きな蛸の手をあげよう、との大意である。八重山民謡を本歌に伊志嶺朝次が編曲したシンプルなメロディーとハーモニーで構成された佳曲である。

子ねまぬ泣くか あんま(母)ん(も)泣きどうし
子ねまぬばろ(笑)か あんま(母)ん(も)ばら(笑)いどうし
(囃子ことば) ホイ ホイヤラヨ
泣くすんや あいなまぬ みだた骨[ふに]どう 食[か]ましようり
泣かんすんや 大蛸[うふたく]ぬ 手[てい]ぬ(の)元[むとう]どう 食[か]ましようり
(囃子ことば) ホイ ホイヤラヨ

谷茶前之浜

谷茶前も琉舞用に用いられる。男女のペアで踊る軽快な舞曲である。恩納間切の谷茶村の海辺に多くのミジン(かたくちいわしの幼魚)が押し寄せてきたので男衆はそれを取りに行き、女衆はその魚を売りに行くという内容の歌である。漁村の若者達の息吹を感じさせる歌と踊りである。

谷茶前[たんちゃめー]ぬ(の)浜[はま]に
スルル(きびなご)小[ぐわー](ちゃん)が寄[ゆ]ていていんど へー (繰り返し)
(囃子ことば) ナンチャ マシマシ でい(さあ)娘小[あんぐわー] ソイソイ
スルル(きびなご)小[ちゃん]や(では)あらん(ない)
大和[やまとう]ミジン(鰯)どう(で)やん(ある)ていんど(そうだ) へー (繰り返し)
(囃子ことば)
兄[あっぴー](青年)達[たー]や(は)うり(それを)取[とう]いが
娘小[は]かみて(頭に載せて)うり(それを)売[う]いが(に) へー (繰り返し)
(囃子ことば)
うり(それを)売[う]ていぬ(から)後[あとう]ぬ(の)
娘小[の] 句[にう]いぬ(の) 美[しゅ]らさ へー (繰り返し)
(囃子ことば)

鳩間節

原曲はゆったりとしたテンポの曲だが、舞踊曲として使われるようになって速いテンポで歌われるようになった。鳩間島は八重山群島のさらに小さい離島である。水源地がなく昔は過酷な環境であった。力強いハーモニーとメロディに付随して、途切れることのないピアノによる三連符とのコントラストが見事である。

鳩間島森[はとうまなかむり] 走[ば]り登[ぬぶ]い 菓蒲[くば]ぬ(の) 下[しちゃ]に 走り登い
(囃子ことば)ハイヤヨー ティバー 美嶽[かいだぎ]チトゥユル
デンヨー 勝[マサ]てい 見事[みぐうとう]
美[かい]しゃ むいだる 森[むり]ぬ(の)菓蒲 美[ちゅ]らさ 別[ち]りたる 辻[ちじ]の菓蒲
(囃子ことば)
浦[うら]ぬ(の)浜[はま]から 通[か]ゆ(う)人[びとう]や(は) 浦ぬまいぬ(の)人心[びとうぐくる]
(囃子ことば)

海ぬチンボウラ

子ども達が群舞で踊る人気のある曲である。軽快でコミカルな踊りは天真爛漫な子供像を見事に振り付け、聴衆を思わず微笑ませる舞台空間を醸し出す。しかし、踊りの振り付けとは逆に、歌詞の内容は花柳界のエロチズムをコミカルに隠語で風刺する内容である。

海ぬ(の)ちんぼうら(巻き貝の一種・小さくて細長い)ぐわー(ってやつは)
逆[さか]なやい(になって)立てば ひさ(足)ぬ(の)先々[さちざち] 危[あぶ]なさや
(囃子ことば)
支度[したく](ていたらく)ぬ(の)悪[わっ]さや 姫[すば]なりなり
サ浮世[うちゆ]ぬ(の)真ん中 ドゥサドゥサドゥッサイ 島ヌヘイヘイ ヘイヘイ
海ぬ(の)さし草[ぐさ]や あん(こんなに)美[ちゅ]らさ なびく
我身[わみ]ん(も)里前[さとうめ](殿方)とう(と) うちなびく
(囃子ことば)
辻[ちじ]や(は)豌豆豆[いんどまみ] 仲島[なかじま]や(は)豆腐豆[とうふまみ]
恋[くい]し渡地[わたんじ] 福豆[いふくまみ](それぞれ色街の名と豆の名)
(囃子ことば)
辻ぬ(の)豌豆豆 食[か]でいんちゃん(食べてみたか) 二才達[に一せーたー]
食でいやんちゃしが(食べてはみたが) 味や覚[うび]らん(覚えてない)
(囃子ことば)
姿[かーぎ]ぬ(の)悪[わっ]さや 取[とう]ってい(は)投げ投げ(投げ捨て)
サ浮世[うちゆ]ぬ(の)真ん中 ドゥサドゥサドゥッサイ 島ヌヘイヘイ ヘイヘイ

だんじゅ嘉利吉

だんじゅ(じつに)かりゆし(おめでたい)の意である。航海の無事を祈る歌である。琉球王府時代、渡唐が決まるとき親戚縁者が集まり、女性達が輪になり一晩中歌い、踊り、祈りをして航海の安全を祈願したという。前半では祈るようにゆっくりと歌い、後半は速いテンポで歌われる。

大事[だんじゅ](まことに)嘉利吉[かりゆし](めでたさ)や 選[いら]でい(選んで)(日が)差しみせる
船[ふに]ぬ(の)綱[ちな] 取[とう]りば 風[かじ]や真龍[まとうむ] サーサー ヘイヨー
(一行目繰り返し)
(囃子ことば)
ハリヨ フニヨ ユーハイセー サッサユーハイセー ササユーハイセー
綱[ちな]取[とう]ゆる船ぬ(の) 寄[ゆ]してい寄しらりみ(寄せられるか) 行もちもり(行ってらっしゃい)
里前[さとうめー](ご主人様) 朝夕[あさゆ] 拝[うが]ま サーサー 嘉利吉[かりゆし](めでたい)
(一行目繰り返し)
(囃子ことば)
ハリヨ フニヨ ユーハイセー サッサユーハイセー ササユーハイセー

* ()……意味 []……よみがな

III 男声合唱組曲「心の四季」

原曲、混声合唱組曲「心の四季」はNHK名古屋の委嘱により、芸術祭参加作品として放送初演(1967.11、合唱名古屋放送合唱団、指揮石丸寛)、後に女声にも編曲され盛んに歌われ「水のいのち」とともに親しまれてきた。男声版は高田氏の没後2002年に高田音楽継承の第一人者で、男声合唱の響を熟知する須賀敬一氏により、世の男達が歌うべき魂の歌として編曲され東海メールクワイアにより初演。

歌っていると心が静かになる。歌っていると何かに祈りたくなる。「心の四季」はそんな歌、言葉の一つひとつが身体(からだ)にしみこんでくる。いつのまにか温かいものに包まれる。

風・光・雨・雪・光・水・流れ・山・星……自然を詠っているようで、実は語られているのは人間そのもの。人の運命、逃れられない宿命、日々、悩みもがき、それでもなお、まっすぐに生き続けようとする人間の姿。

高田三郎の音楽はすべて、「自分は誰なのか、人間とは何なのか」を問う祈りの音楽である。飴らず、おごらず、ひたすら真実のあるべき姿を求めて続ける。

時には風となり、桜の花びらを散らす。時には山となり、人をその懷(ふところ)に抱(いだ)く。時には雪となり、激しく降りつづける。そして、星となり、真昼の空できらめく。そう祈りながら……

高田三郎の醸し出す曲は、私達に言い表し難い感動を与えてくれる。その感動を表わし、そして、皆様に伝えられるよう、精一杯歌います。吉野弘の詩の美しさと、男声のハーモニーをお楽しみいただければ、幸いです。

(記・指揮者／徳永和彦)

風が

人生は風と共に。春の風は芽生えの中に滅びる哀情を奏で、夏の風は人の心を琢磨して乾きの谷を吹き渡る。秋の雨に心を洗われ、冬の雪には人は逃れぬ宿命の哀しみの色を見る。風は生命のすべてをその懷に包んで過ぎて行く。時の流れ、見えない時間。

みずすまし

前奏で池ができるんだ。そして歌うとみずすましが泳ぎ出す……と高田は言った。みずすましが暗示するもの、それは“生きる”ということ。生命は水の中にあり、魂の安らぎは懸命に生きたものに与えられるのだ。

三

流れ

岩や魚が各々の生き方で川の流れを遡っている。誠実に心を尽くす者を遙かの高みから見守るものがある。卑屈に生きるものに人生の成就はないのだ。

山が

人々が憧れ、安らぎを求める山の気高さ。だが、山もまた見はるかず地平の彼方、見上げた空のはるかの高みに焦がれているのだ。そこに行くことを願いながら、山であることの宿命の中に、祈りの姿で佇んでいる。

愛そして風

過ぎた愛への追慕。愛にはさまざまな形があり、愛もまた自らの宿命の中にある。枯葉はすでに宿命のままを生きている。ひとだけが……秋の風に吹かれるたび、なお己の宿命に戸惑いながら、定められた愛の形を探している。

雪の日に

『永遠の純白』その切なる願いのために、まるで押え切れない人間の精神のように激しくその上へその上へと降り続ける東北の雪。この曲の中で持続されるフォルテはそのフォルテなのだと高田三郎は言う。そして、東北の雪に生きっきりて白い歌を歌う、と。

逃れえぬ宿命との壮絶な対決。

真脣の星

永劫の彼方からいつに変らぬつましくも真理を照らす輝きを放ち続いている密やかだが確かな存在。謙虚で純真な心。自分に与えられた分を守ってひっそりと生きている星たちが静かに語りかけていることを、今こそ私達は心中に深く刻みたい。魂のやすらぎと癒しを。

(東海メールクワイヤー 片山和弘)

1
風が
心の四季

吉野弘詩

心の四季

吉野弘詩

1 風が

風が桜の花びらを散らす
春がそれだけ弱まつてくる
ひとひらひとひら舞い落ちるたびに
人は見えない時間に吹かれている

光が葡萄の丸い頬をみがく
夏がそれだけ頬を増す
内に床しい味わいを溢え
人は見えない時間にみがかれている

雨が銀杏の金の葉を落とす
秋がそれだけ透き通つてくる
うすいレースの糸を抜かれて

雪がすべてを真白に包む
冬がそれだけ汚れやすくなる
汚れを包むとすぐ雪が降る
私は見えない時間に包まれている

2 みずすまし

一滴の水銀のような みずすまし
やや重く 水の面を凹ませて
浮いている 泳いでいる
そして 時折 水にもぐる

あれば 暗示的なこと
浮くだけでなく もぐること

わたしたちは 日常という名の 水の面に生きている
その深さは わずかでも 浮いている だが もぐらない
もぐれない — 日常は分厚い

水にもぐった みずすまし
水の深みに出会う筈 水の力を
身体を縛めつけ 押し返す

3 流れ

岩がしぶきをあげていた
深みを渡る馬のよう
青い流れをぬみながら
ひとつどころに阻まれて

魚がひつそり遡る
岩のはどりを川上へ
強韌な尾で 水を蹴り
速い流れを 貫いて

岩がしぶきをあげていた
あきらめ知らぬ馬のよう
魚がするどく遡る
強韌な尾で 水を蹴り

逆らうにしても それぞれに
精一杯な仕方がある
凜々しい魚は遡る
無骨な岩は 水を噴む

流れは 豊かに 大らかに
魚は岩をいやしめず
岩は魚をおとしめず
青い流れを送り迎え
それがいかにも爽やかだ

むしろ卑屈なもののたちを
押し流していく 川下へ
押し流していた 川下へ

4 山が遠くから人の心をとりこにする
人がその心をさがしにゆく
それで身体ごととりこになる

5 愛そして風
愛の疾風に吹かれたひとは
愛が遠かに飛んでいたあとも
ざわめいている
揺れている

6 風に吹かれて枯草がそよぐ
風が去れば素直に静まる
ひとだけが愛の疾風に
いくたびとなく吹かれざわめき
歌いやめない — 思い出を

雪がはげしくふりつづける
雪の白さをこらえながら
撒きやすい雪の白さ
誰もが信じる雪の白さ
信じられている雪はせつない
どこに純白な心などあろう
どこに汚れぬ雪などあろう
雪は汚れぬものとして
いつまでも白いものとして
空の高みに生まれただ
その悲しみをどうふらそう

IV Afro-American Spirituals

Spirituals/黒人靈歌は、African-Americans/アフリカ系アメリカ人にとって苦痛に満ちた時代に生まれた唄で、それは、彼らが故郷であるアフリカ大陸から何千マイルも離れた見も知らぬ地まで奴隸船で運ばれ、そこで奴隸として生きなければならなかつたという極めて切迫した現実の中で生まれました。アメリカ合衆国に連れてこられた彼らは奴隸主である白人に教会に連れていかれ、教会の礼拝を経験しましたが、彼らが眞の意味で魂の解放を得たのは、一日の苦役を終えた夜遅くに仲間と秘密に集まりあって、白人達の家から離れた場所で自分達だけの礼拝を持って、神に祈り、歌い、踊った時間であったと伝えられています。それが彼ら自身のキリスト信仰の形でした。

彼らが集まつた場所は Hush Harbor と呼ばれ、白人達の教会を「目に見える教会」としたならば、Hush Harbor は社会的に「見えない教会/隠れた教会」と言えました。奴隸主達は奴隸達が集団を形成することを非常に警戒していたため(もちろん奴隸蜂起、叛乱などをおそれていた)、Hush Harbor が発見されれば刑罰が加えられるのは明白でしたが、その危険の中で彼らは集まりました。Spirituals の歌詞と音楽は、逆にそうしたテンションによって強められたともいえるでしょう。そうした切迫した日常からの解放、人間としての眞の自由を求める魂、彼らがアフリカ人として継承してきた文化/伝統/習慣の発現、イエス・キリストを信じる新しい信仰の中で彼らの求める自由が実現されるという希望の確信によって Spirituals は生み出されました。こうして、Spirituals は Hush Harbor のような場所を中心長い時間をかけて形成されていったと言われています。

Steal Away

Spirituals は、教会の外側ではアフリカ系アメリカ人達のもっとも危険な希望と欲求を表現する秘密の暗号としても機能していました。彼らはお互いに、何かの集まりや礼拝のタイミング、逃亡の機会などを奴隸主達にわからないように伝えるために、日々のコミュニケーションのなかで Spirituals を使っていたといわれます。このような、Spirituals に込められたダブル・ミーニングを理解することなしには、彼らが奴隸制時代を生き抜いたための方法として Spirituals がいかに重要な存在だったかを完全に把握することはできない。この曲は、彼らが hush harbor で Meeting が行われることをお互いに知らせるために使つた曲として有名で、夜中に hush harbor に集まり礼拝をした時には、彼らの信仰するイエス・キリストへ steal away する(自分のすべてをゆだねてイエス・キリストとともにいる)という意味で歌わっていました。1831年に Virginia 州で奴隸主に対し暴動を蜂起した Nat Turner は、共に叛乱に参加する者を募るのに、この歌を使ったと伝えられています。

Go Down, Moses

彼ら奴隸達が聖書にふれていく中で、神の民として生まれ、エジプトで奴隸として捕囚され、のちにモーゼによって解放されるという旧約聖書の中のユダヤ民族の歴史と自分達の歴史の間に、強い親近感を持ち、奴隸として捕らえられても、解放されるんだという希望を旧約聖書のストーリーの中にはっきりと見たのでしよう。歌詞は23番まであります。また、Underground Railroad /地下鉄道(合衆国北部やカナダへ奴隸が逃亡するのを援助した秘密組織)代表的指導者であった黒人女性ハリエット・タブマンは逃亡奴隸を集めるためにこの唄を使ったと伝えられています。

Nobody knows de Trouble I see

Spirituals はアフリカ系アメリカ人の苦痛と共に生まれましたが、それを耳にする者なら誰でも、それは単なる深く美しい絶望の表現以上のものであることが感じられるでしょう。Spirituals が jubilee songs(歓喜の歌)とも呼ばれるのは、奴隸としての絶望の直中で、強さと希望と神への信仰を持ち、Spirituals がその痛烈な表現になっていたからです。この曲は主イエスにその苦しみを訴え、神への信仰を現わした感銘深い歌で、ゆっくりとした、メロディを引っ張った長いフレーズのものである。旧約詩篇124、新約マタイ11:28をもとに書かれている。

Ride the chariot

「朝になったら戦車に乗ろう、主イエスに会うために」と歌い出される。chariot = 戦車とは、預言者エリヤが生涯最後の日に、神によって遣わされた火の戦車が馬に引かれて現れ、嵐の中を天に上つていった……という列王記下2章11節の記事に由来している。彼ら奴隸達が差別と過酷な労働を強いられた時代、いつ神に呼ばれても良いように、神の前に恥ずかしくない生き方をすることを喚起すると共に、主イエスに救われた確信と喜びを歌った曲。

Soon-ah will be done

正確には“Soon I will be done”、意味は“もうすぐ私は終わりだ”。彼ら奴隸達の魂の救いを訴える叫びの歌である。「もうすぐ私はこの絶望の世界から死んでいなくなるだろう。この絶望の、この絶望の世界から」。まるで呪文のように繰り返すこの言葉、そして、母に会いたい、イエス様に会いたいと叫ぶ。

ごあいさつ



沖縄男声合唱団
団長／宮城 稔

沖縄男声合唱団は創立34年になります。30年ほど前に、東京のいそべとし記念男声合唱団の団員の一人が沖縄に転勤で来られたとき、私たちの合唱団に入団しました。それが縁となって、二つの団はドイツ・ハンガリー、東京の演奏会など、何回かの合同演奏会を持ちました。10年ほど前に西南シャントゥールの団員の石橋さんが転勤で沖縄に来られたときも私たちの合唱団に入団し、一緒に歌いました。彼が福岡に帰つてからしばらくして、一緒に演奏会をしたいという話がありました。が、なかなか実現しませんでした。昨年になって、私たちの演奏会に西南シャントゥールが賛助出演していただき、長年の夢がやっと実現しました。本日は私達が西南シャントゥールの演奏会に出演することができ、嬉しく思っています。一人の団員の紳で二つの合唱団が結ばれるということを二度も経験して、私達は団員の紳のありがたさを痛感しています。本日は紳をかみしめて精一杯歌います。

沖縄男声合唱団は結成されてから34年を迎える。メンバーの入団の動機はさまざま。ハーモニーに魅せられて入団した者、音楽教師で合唱活動を自らも体験し続けようとして入団した者、大声で歌うことによってストレスを発散させようと入団した者、悪声を改善したくて入団した者等々……。

異質で個性的、様々な職業からなる集団を、アカデミックな合唱団へ高めようと、指揮者の宮城敏さんはひたむきである。メンバーには、ウチナーンチュ(沖縄人)独特のテーゲー主義(適当主義)があり、時間にはルーズなどころがあるし、音楽に関しては、きめ細かな音楽づくりを忘がちで、指導されたことを次の練習時にはもう忘れてしまうことがたびたびである。指揮者の要求に応えられるようにレベルの向上をめざしてはいる。それとともに、平均年齢のほうも年々向上している。この二つが比例すればよいのだが……。

練習は毎週木曜日と、毎月第2日曜日の強化練習日。木曜日の練習は仕事帰りで疲れているのか、なかなかいい声が出ないが、日曜日は元気な声が出る。

それから、日曜日の強化練習の後は、アルコールが入る懇親会を持つようによっている。これがじつに楽しい。それぞれの近況報告や団の将来を語り合つたりしている。台湾、ドイツ・ハンガリー、オーストラリアのあと、10年ほど外国に行っていないのでそろそろ外国に行きたいという話が必ず出る。異業種間交流の場でもある。定例の練習日には参加できなくても、この日は顔を見せる強者もいる。今のところ2ヶ月に1回だが、毎月飲み会を持ちたいとの声も多い。

じつは、この1・2年に嬉しい変化が起きている。定年後の新人団員が多く入ってくるとともに若い新人団員もこれまでになく入ってきたことである。これで幅の広い男声合唱ができるのではと期待しているのだが……。

レパートリーは沖縄の曲が重要な位置をしめる。ロシアの合唱団がロシア民謡を重厚なハーモニーで歌つて独自な世界をつくったように、沖縄音楽を合唱にのせてアカデミックな世界をつくりだすことを大きな目標としている。歩みはのろいが、レベルの向上をめざしながら、仲間とともに男声合唱を楽しんでいる。





指揮／宮城 敏 *Miyagi Satoshi*

琉球大学教育学部音楽科卒業とともに上京、1969年から1972年まで東京混声合唱団の一員として活躍するとともに、声楽を下八川圭祐、磯谷威に師事。1972年に沖縄男声合唱団を立ち上げ、指揮者として活動する。県内外の演奏会はじめ、1991年のハンガリー、ドイツ演奏旅行で、東京在の「いそべとし男声合唱団」との合同合唱団を指揮。1994年の沖縄男声合唱団オーストラリア公演では、マルボルンとシドニーのオペラハウスで、沖縄及び日本の曲を中心に紹介し好評を博す。声楽家（バリトン）としても、ベートーベンの「第九交響曲」や「メサイヤ」等のリストとして活躍する。沖縄県合唱連盟会長



ピアノ／宮城佳代子 *Miyagi Kayoko*

沖縄男声合唱団創立当初からの伴奏者として、第1回から今日までの演奏会をはじめ、東京、台湾、ハンガリー、ドイツ、オーストラリア公演等すべての演奏会で伴奏を担い好評を博す。豊かな音楽性と高度なテクニックを持ちあわせ、男声合唱の魅力を充分に引き出し、息の合うピアニストとして沖縄男声合唱団にとって欠くことのできない貴重な存在である。ピアノ曲をはじめ、器楽曲、声楽曲、合唱曲について幅広く音楽の研鑽を積み、日々の演奏活動を行う。また、地元新聞社主催のカルチャー講座「大人から始めるピアノ教室」で講師を務めるとともに、後進の指導に当たる。全日本ピアノ指導者協会会員



指揮／徳永和彦 *Tokunaga Kazuhiko*

福岡高等学校在学中合唱部に所属、指揮を担当。1969年西南学院大学商学部卒業。在学中、西南学院グリークラブ創立40周年記念演奏会にて学生指揮を担当。西南学院グリークラブOBでもある、合唱指揮者故・福永陽一郎氏をはじめて西南学院グリークラブへ招聘。1997年、西南シャントゥール委嘱作品、多田武彦作曲：男声合唱組曲「三崎のうた・第二」を初演。1996年より西南シャントゥール指揮者。



指揮／佐藤棟也 *Satoh Tohya*

福岡高等学校在学中合唱部に所属。1970年西南学院大学文学部フランス語専攻卒業。在学中、西南学院グリークラブ創立50周年記念演奏会、東京・大阪記念演奏会にて学生指揮担当。創立50周年記念委嘱作品 清水脩作曲「木下夕爾の三つの歌」を初演。卒業後、石丸寛氏の東京フィルハーモニックソサイアティ他各合唱団で合唱活動。現在、西南シャントゥール副指揮者。



ピアノ／植村和彥 *Uemura Kazuhiko*

福岡教育大学教育学部中等教育教員養成課程音楽専攻卒業。福岡教育大学大学院教育学研究科音楽教育専攻演奏学講座修了。第43回北九州芸術祭にて伴奏賞受賞。現在、福岡を中心として主に声楽や器楽とのアンサンブル、伴奏の分野で活動中。片山由紀、倉員由紀子、福田ひろみ、福田伸光の各氏に師事。

西南シャントゥールは1954年（昭和29年）4月、西南学院グリークラブOBの54期の内海敬三氏（前・指揮者）らが中心となり結成された。以来、西南学院卒業者ののみのメンバーで構成されており、西南OBの結束の堅さを継続している。シャントゥール〔Chanteurs〕という名称は、当時のアメリカ海軍の男声合唱団名の“*The Sea Chanters*”とフランスの男声合唱団名“*Companion de la Chanson*”を参考にし、結局フランス風に洒落て西南シャントゥール〔Seinan Chanteurs〕と命名された。

結成された当時は主に全日本合唱コンクールへの出場を目指し、3位入賞などの実績を残している。現在では、専ら年に一度の「定期演奏会」を活動の中心に置き、同時に又各地の合唱団とのジョイントコンサートやゲスト出演活動を続けている。現在全国的にみても、毎年定演を持つ貴重な一般男声合唱団として高く評価されている。

又、定期演奏会においては、委嘱作品の初演にも力を注ぎ注目されている。

多田武彦作曲：男声合唱組曲「柳河風俗詩・第二」・「三崎のうた・第二」

吉田悠作編曲：日本の歌による男声合唱のためのメドレー「海へ山へ」・

男声合唱とハープのための「アイルランド民謡」

宇野正寛編曲：男声合唱曲「日本の歌メドレー」

創立50周年を記念し、映画・ドラマの作曲家として活躍中の大島ミチル氏に委嘱した 男声合唱とピアノによる『生命の誕生』を初演した。またNHK金曜時代劇「御宿かわせみ」の主題歌「悲しい歌は嫌いですか」の男声合唱編曲も委嘱した。

（社）全日本合唱連盟・福岡県合唱連盟・福岡音楽団体連絡会 会員

《1年間の演奏活動》

2005. 12.11 2005西南シャントゥール定期演奏会	アクロス福岡シンフォニーホール
12.23 「福岡女学院創立119周年記念クリスマスコンサート”メサイア”(有志)	アクロス福岡シンフォニーホール
	北方町公民館
2006. 1.29 武雄・北方町演奏会	西南学院大学体育館
3.24 西南学院大学卒業式サービス	西南学院大学体育館
4. 3 西南学院大学入学式サービス	西南学院ランキンチャペル
4. 7 西南学院大学クラブ紹介オリエンテーションステージ	西南学院ランキンチャペル
6. 2 西南学院音楽会	西南学院ランキンチャペル
7.15 ありがとうランキンチャペル	西南学院ランキンチャペル
11.11 西南ブリエール20周年記念演奏会賛助出演(有志)	西南学院ドージャー記念館音楽堂
11.25 スインギング・クリスマス	日本ルーテル福音教会博多教会
12. 2 西南シャントゥール第29回定期演奏会	アクロス福岡シンフォニーホール

運営委員

会長	鶴原太郎	馬頭経明
副会長・総務	的野恭一	馬頭経明
副会長	木道昇	徳永和彦
マネジャー	窪田敏博	佐藤棟也
サブマネジャー (インスペクター)	大司真	倉地進(T1)
パートマネジャー	日高良公(T1)	野辺和馬(T2)
パートマネジャー	石松茂(T2)	中嶋恒生(B1)
パートマネジャー	和田正義(B1)	鶴喜広(B2)
パートマネジャー	中垣登(B2)	ライブラリアン
会計	小西眞二	山元一憲
監事	石川和義	
監事	古賀正義	
沖縄担当マネジャー	石橋一幸	
ピアニスト	植村和彥	
ヴォイストレーナー	久世安俊	

沖縄男声合唱団

1st Tenor	2nd Tenor	Baritone	Bass
糸数 剛	有銘 興一	加藤 英夫	新城 安哲
塙浜 康男	亀川 安孝	神谷 朝健	国吉 清昂
新城 哲夫	知念 栄	金城 秀則	下地 広信
高江洲 奈	照屋 忠敬	久高 友隆	平良 信和
名幸 久行	宮城 稔	城間 剛	照屋 寛八
与座 豊次		當眞 錦	西銘 政美
		名嘉山興武	又吉 元治
		辺土名 朝吉	宮城 正治
		松田 盛光	
		安田 正昭	

西南シャントゥール

1st Tenor	2nd Tenor	Baritone	Bass
乙藤 成美	刀根 亨一	本永 哲也	鶴原 太郎
宮地 基次	的野 恭一	中辻 浩一	下川 勝史
高木 正志	福井 勲	和田 正義	木道 昇
中尾 武史	大石 宏	鈴木 勘	田中 義信
日高 良公	馬頭 経明	粟野 寿泰	鶴 喜広
飛松 智明	野辺 和馬	石川 和義	松枝 保匡
山元 一憲	波多江 忠	古賀 正義	平田大三郎
倉地 進	徳永 和彦	篠崎 詔二	阪井 俊文
大司 真	黒江 量二	松尾 淳郎	蓮尾 勝右
山口 聰	石橋 一幸	佐藤 棟也	毛利 正明
	徳永 武雄	里中 健	波多野勝彥
	福田 治	小西 真二	夏秋 毅昭
	石松 茂	中嶋 恒生	武藤 新
	窪田 敏博	高嶋 裕二	森 博彥
	眞藤 敬介		八尋 憲二
	首藤 純		角 正信
			中垣 登
			谷口 俊治

西南学院グリークラブOB参加メンバー(第4ステージ)

1st Tenor	2nd Tenor
河野 正海	下田 昭
西村 克俊	

Grain & Pet Care Communication



株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE. 0942-85-1125(代) FAX. 0942-82-9780

きどう動物病院
KIDOU SMALL ANIMAL HOSPITAL

獣医師 木道 寛・木道浩子

福岡市城南区田島5-4-18
TEL 092-862-1222



welcome
不動産のことなら何でもお気軽に
中垣不動産

〒818-0121 太宰府市青山3-27-2

☎ 092-918-6487

<http://www.nakagaki-fudousan.com>

 株式会社 山本文房堂

●本店／福岡市中央区大名2丁目4-32 〒810-0041 ☎092(751) 4342

●すみぢか店／中央区天神2丁目住生福岡ビル地階 〒810-0001 ☎092(721) 0163

●アートスクール／中央区天神2丁目住生福岡ビル地階 〒810-0001 ☎092(721) 0163

*通信販売を承ります。お気軽におたずねください。

URL <http://www.yamabum.com> E-mail yamabum@anet.ne.jp

日清ペットフード

日本の生活環境で暮らす愛犬の健康を考えるドッグフード 『新発売』 ヘルシーレーベル



ペットの元気と長生きのために。日清ペットフード(株)お客様相談室 0120-22-1124 http://www.nissin-pet.co.jp/



ドッグフード/
オールステージ用総合栄養食

ねこ元気 毎日やねだりのグルメフード

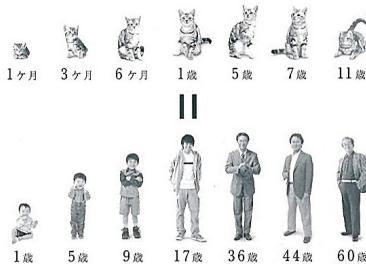


●〒108-5326 東京都港区三田3-5-27 ユニ・チャームペットケア株式会社 http://www.uc-petcare.co.jp
●お問い合わせ先フリーダイヤル 0120-810-539 ユニ・チャームペットケアお客様相談室

unicharm
ユニ・チャーム ペットケア

あいざわしあわせ。
AIXIA
アジア株式会社

見た目だと、猫の年齢は分からない。



猫にも年齢にあわせた食事が必要です。

人間で考えても、育ち盛りの子供とお年寄りでは、必要とするカロリーや栄養素が違うように猫でも同じです。子猫の健全な成長に配慮してタウリン・リノール酸を配合した「子猫のための健康缶」。高齢猫の健全な代謝に配慮してビタミンB群・ボリフェノールを配合した「成猫の健康缶」。さらに「成猫の健康缶」は、歯が弱った高齢猫のために「ムース」おかゆタイプもご用意しました。愛する猫のために、年齢にあわせた最適な栄養バランスの食事を選んであげてください。

※AIXIAは、マルハグレーブの一員です。



上を向いて歩こう

永 六輔：作詞
中村 八大：作曲

上を向いて歩こう 涙がこぼれないように
思い出す 春の日 ひとりぼっちの夜

上を向いて歩こう にじんだ星を数えて
思い出す 夏の日 ひとりぼっちの夜

幸せは雲の上に 幸せは空の上に
上を向いて歩こう 涙がこぼれないように
泣きながら歩く ひとりぼっちの夜

悲しみは星の影に 悲しみは月の影に
上を向いて歩こう 涙がこぼれないように
思い出す 春の日 ひとりぼっちの夜

予告

西南シャントゥール第30回定期演奏会

2007年12月8日(土) 14:00開演
アクロス福岡シンフォニーホール

program

第30回演奏会記念 委嘱作品

信長貴富：編曲

団塊の世代に贈る「ニューミュージック特集」

賛助出演

NHK福岡児童合唱団MIRAI



SINCE 1954 TO 2006